

担い手不足の課題に挑む、コーディネーターの必要性とその育成

～Shake Hands に対するふりかえりと分析を通して～

千葉県松戸市 ボランティアサークル Shake Hands 影山 貴大



第1章 テーマ設定の背景

“担い手不足”、この言葉を何度メディアを通じて、そして現場の声から聞いただろうか。地方ではさることながら、今となっては中心市街地ですらこの“担い手不足”は大きな問題となっている。それは昨今叫ばれている少子高齢化の単純な影響だけでなく、高度経済成長期に起きた都市化の影響として、地元から都会へ多くの若者が流れてしまった結果でもあるだろう。

しかし、今こういった現状に対して一筋の光明が差し始めた。若者たちの中で、都会の大企業に勤めるよりも、何か自分たち自身の力を活かせるような仕事に就きたい、もしくは作りたいという声がよく聞かれるようになってきた。とかく、大学生たちに話を聞くとこういった思いを持っている学生が多いことに気づく。“自分が何をしたいのか、そもそも何ができるのかが分からない”“企業に就職できても、安定した人生をおくれるか不安だ”“できることなら慣れ親しんだ地元で仕事を見つけない”。

その一方“担い手不足”で悲鳴を上げている地域からは、“若い人が地元にはいない”“伝統工芸や農業など継いでほしいが、こういったものに興味を持つ若い人はいない”“皆 IT や大企業などの華々しさが感じられる仕事の方につきたいのだろう”そんな声が上がっている。しかし、これらは悲しいすれ違いである。地元、とくに地方に対して憧れを抱く学生は年々確実に増えている。もしそこに彼らに働く場所が地方にあることを伝えられれば、もしくは彼らが自ら生業を起こしてみたいという魅力が地方にあることが分かれば、この両者の抱える問題はニーズへと変わり、その地域の活性化へと繋がっていくだろう。

この考えを裏付けるキーの一つとして私自身が立ち上げ、運営をしてきた「ボランティアサークル Shake Hands」という学生任意団体の活動を論じていく必要がある。本レポートは、この「ボランティアサークル Shake Hands」の活動に焦点を当てつつ、私が活動を通して見聞きしてきたその現状と私自身の動きから見えてきたコーディネーターという“パイプ役”の必要性とその育成について論じていきたいと考えている。

第2章 ボランティアサークル Shake Hands の成り立ちとその経緯

この章では、学生任意団体「ボランティアサークル Shake Hands」を私が立ち上げた経緯とその運営の仕方、そして活動の中で見えてきた地域と学生たちの現状と変化について詳しく論じていきたい。

(1) 団体を立ち上げたきっかけ

2011年3月11日、東日本大震災が発生した時、私はアメリカのフロリダ州にいた。当時の私は医師を目指し、フロリダにある2年制の大学に通っていた。それまでの人生でボランティアや自治会への参加の経験もなく、ただ自分の医師になる夢をもって勉学にひたすら励んでいた。そんな時に人生の転機とも言える出来事、東日本大震災が発生した。生まれて初めて言いようのない衝動に駆られたのを覚えている。自分の生まれた国で何かとんでもないことが起こっていて、そんなニュースをなんの実感もないままだに聞くしかできない自分がいた。“冗談ではない”そんな気持ちが沸々とわいてきて、気づいた時には大学に掛け合い支援物資を集めていた。

生まれて初めてのボランティア活動はこうして自ら物資を集めて、被災地に送る震災ボランティアであった。集めた物資をまとめて現地へと送り終えたのち、私の心に浮かんだ感情は“やり切った”のではなく“楽しかった”であった。不謹慎な表現になってしまったが、私が“楽しい”と感じたのは支援物資を集め被災地に送れたことに対してではなく、この活動を通して本当に様々な人たちに会い、価値観に触れ、助けられたその体験に対してだった。ただただ衝撃だった。自分のすぐ近くに、これだけの多様な価値観を持ちながら生活していた人がいて、なんの見返りも求めずに私の故郷の為に物資をもってきてくれた。

私の世界が一瞬にして開けた感覚は今でも忘れることが出来ない。“この経験を同じ年代の人たちや日本の学生たちと共有したい、知ってもらいたい”そんな思いが強くなり、2013年2月7日「ボランティアサークル Shake Hands」を立ち上げた。

(2) Shake Hands の活動内容

Shake Hands は日本語で「握手」を意味する。活動内容は“他の市民活動団体やNPO、及び市の取り組む活動への企画・運営補助”であり、まさに他の団体と手を取り合って活動をする、ボランティア団体のボランティアをする活動だった。そんな活動内容にした理由はただ一つ、“いろんなボランティアの場に出ていけば、より多くの人たちと出会うことが出来る”そう思ったからだ。メンバーの条件は“自分を若者だと思う人”、あえて“若者”とはっきりと明記せず、どんな人でも思いさえ持っていれば参加できる体制にした。

活動を始めた際は、私の周りの友人に声をかけ7人ばかりで活動を行った。初めての活動は私の故郷である松戸市で行われていたNPO・市民活動見本市というイベントだった。Shake Hands を立ち上げる際に相談に伺ったまつど市民活動サポートセンターのコーディネーターの方に、“見本市というイベントがあるから、その運営ボランティアを1回目の活動にしようか”とお話をいただいたからだ。

松戸で活動している様々な市民活動団体やNPOが一堂に会し、各ブースを設ける。我々の役目はその運営ボランティアとしてイベント全般の補助をすることだった。ブース数が多かったため、ツアーを組むことを提案し、時間帯を分けて参加者に会場を案内した。案内をしながら、改めて多種多様な活動がこんなにも自分の住んでいる市の中あったのかと驚嘆したのを覚えている。ツアーを提供する立場だったのだが、いつの間にか参加者と一

緒に団体の説明に聞き入ってしまった。私達は知らなかった、こんなに多くの地域の方たちが街の中で活動していて、すぐ身近に感じていた当たり前の生活を支えてくれていたことを。

私の中では、支援物資を集めたときの感覚が蘇っていた。これを知りたかった、そして知らせたかったのだと。結果、ツアー自体の参加者は7名程度と多くはなかった。しかし、運営側に「なぜ今年はこんなに若者がボランティアで多かったのか？」という問い合わせが各団体から入り、Shake Hands の名前は一気に広がった。

それからというもの毎週土日には何かしらの依頼が入り、様々な団体の活動を手伝って回った。メンバーも行く先々に個別に関わっていた若者を巻き込みながら、半年後には30名を超えていた。依頼の内容は多岐にわたったが、主たる活動は各団体の行うイベントの補助であった。

団体のメンバー構成上、“カジュアルなボランティア参加”をうたっていたため、こういったイベント当日の運営補助のような依頼が Shake Hands としても一番的を射ていた。中には実行委員になって企画から参画するイベントもあったが、会合が平日の日中や夜ということもあり、自由がきいた私がすべて参加しメンバーに共有する形をとった。また団体によっては普段の活動への長期的参加を望む声があったが、様々なボランティアを体験していく Shake Hands のスタイルには合わず、うまくマッチしなかった。だがその中でも、そういった団体の活動内容に興味関心があるメンバーがいた場合は個別にマッチングをしていた。



復興市での福島伝統工芸販売補助



地元の飲食店が開催したイベント補助

(3) 学生と地域に生まれた変化

そういった形で活動を繰り返していく中で、関わる若者や学生たちに変化がみられるようになった。もともとは指示を待つことが多かった彼らが、積極的に“これやりましょうか？”“これが必要ではないですか？”など自ら声を出し始めた。見ていると彼らが提案するようになったことは、今までの活動先で教わったことや、繰り返し行ってきた作業などだった。一例をあげるならば、テントの立て方やバルーンアートなど、活動先で身に着けたノウハウを他の場面でいかんなく発揮するようになったのだ。“学園祭でバルーンアートをやることになって、皆に教えるんです”“このあいだ学校のイベントでテントを立てると

きに先導していたら先生たちにビックリされました”どこか誇らしげにそう話す彼らの顔を見て確信した。彼らはこの活動を経て、着実に成長をしていたのだと。地域の活動を手伝う傍ら、その中で地域の方たちの教えてくれるノウハウを吸収していたのだ。正直に言えば、これは私が想定していた成果をはるかに上回る結果だった。

そんな中、地域の側にも変化がみられるようになってきた。依頼を出してくる団体も最初は少し警戒していることが多い。“何をやらせたらいいのだろうか？”“どの程度のことなら任せていいのか？”人手不足ではありながらも今まで関わる機会が薄かった若者や学生相手ではやはり戸惑いは出てきてしまう。そういう時は指示を私が介してメンバーに伝え、動きやすいように工夫はしていたが、同じ団体に何度も関わるうちに私を介さず地域の方々が直接メンバーに指示を出すようになっていった。“〇〇君はこれならできるよね”“〇〇さんは対応が丁寧だから接客お願い”いつの間にか若者に対する戸惑いは消え、信頼に変わっていく様子がまじまじと見て取れた。

活動から2年半がたったとき、団体の構成メンバーは50名を超え、そのほとんどが学生によって構成されるようになった。依頼も私自身に来るだけでなく各メンバーに直接連絡がいくようになってきた。そんななか、やはりトラブルが起きた際や、最終的な判断、そして実行委員などの企画に携わる活動などは私がすべて引き受ける体制は変わらなかった。このままでは肝心なメンバーの成長を私自身が阻害しかねない、そう思い2015年9月私は自ら代表を辞した。それから少しの間はメンバーもなれないやり取りをしたり、トラブルが起きたときにしどろもどろになってしまったりとうことはあったが、今は事務局を自分たちで据え、自立して動いている。

第3章 Shake Hands を求める学生と地域の背景

前章までの Shake Hands の動きから見えてきた学生と地域、それぞれの現状と課題を一度この章で客観的にまとめてみたいと思う。

(1) 何かをやってみたい学生たち

Shake Hands に参加している学生を対象に見てみると、彼らは皆、“何か人の役に立つことをしてみたい”“何かやってみたかったので、とりあえず参加してみた”“楽しそうだったから”といった声が多くあがっていた。こういった声を聞いていく中で、感じたことは私を含め彼らがボランティアや地域のフィールドを“挑戦の場”としてとらえているということである。社会に出る前の段階で、ある種生活を賭けずに自由に自分の力や、やりたいことを試す場としての可能性を地域に感じているのだ。そしてその中で得たノウハウや力をもって自身の人生の糧としている。また現場で自分自身の力を認めてもらえることで自己有用感を得て、よりクオリティの高い動きをしていくようになっていた。これもまた自分自身の力を認めてもらいたいという今の学生が抱く思いを、地域が満たしていたのであろう。

その一方、彼らの抱える課題としては、自身の力をふるえるような場の確保ができていないということである。そういった場を自ら切り開けるような学生は、恐らく何らかのアクションを自分で起こしていけるため、特にフォローの必要もないだろう。しかし、Shake

Handsに参加している学生の多くは、自分自身でそういった場を確保していくほどのコミットメントや“覚悟”をまだもてていない場合が多い。それほど、自ら地域に出ていくためにはパワーが必要なのである。挑戦したいと思う一方で、そういった場を自ら確保していくほどの“覚悟”は持てていない、これが今の学生たちが抱える現状の課題であると見受けられる。

(2) 新しい流れがほしい地域

対して地域の現状としては、前述したとおり若い担い手の不足から、若者に地域に関わってもらいたいという声が多数聞こえてくる。これは地縁団体としても市民活動団体としても同じことであるが、どこも高齢化が著しく活発な活動が難しくなっているのだ。Shake Handsの活動がここまで広がったのも、私を含め主に学生たちで構成されており、かつ“自分たちの活動を支援してくれる”ような団体がその他に皆無だったからだ。

地域の現状は課題としてもとらえることが出来るが、もう一つ大きな課題としては自ら繋がりを創りに行く活力の不足である。この課題は学生側とも通ずるのだが、地域の場合には高齢化によるところが大きい。“他の地区や若い人とも繋がりをもっていかなければならないことは分かっているが、如何せんもうそこまでの活力がない”といった声を関わる先々で耳にしてきた。また仮に若者が入ったとしても、その対応が分からない等、若者を求める一方で彼らを活かすノウハウがないのである。この課題を解決していかなければ、担い手不足を解消していくことは至極困難になってくるであろう。

第4章 学生と地域を繋ぐコーディネーターの役割

前章では、学生と地域、それぞれの現状と課題についてまとめてみた。その上で両者に共通する課題として“他と繋がる活力の不足”が見受けられた。また学生が地域に入った後にも、彼らがベストパフォーマンスを発揮していくためには、彼らを活かすノウハウがなければならないことが分かった。これらの課題を解決していくためには、学生と地域を繋ぐコーディネーターの存在が必要となってくる。Shake Handsと地域の間で奔走していた自分の行動に焦点を当てつつ、コーディネーターの役割について論じていきたい。

(1) 積極的に関係をつくるパイプ役

まずは学生と地域の繋がりをつくるフォローであるが、第一に必要なのが、地域との関係づくりである。Shake Handsでは私が依頼のあった地域や団体の会合にまずは顔を出させてもらうことが良くあった。仮につながりが全くないが参加してみたいと思うイベントなどがあればこちらから積極的に問い合わせをして、何かボランティアをやれないかとアプローチをかけることもあった。学生と地域、双方が自分から繋がりをつくることに積極的になれないのであれば、その役目をコーディネーターが担う必要がある。特に地域とのつながりを作るためには、実際にその地域に入り、信用を得なければならない。その為には地域のボランティアに参加したり、会合に同席させていただいたり、飲み会に参加したりなど、とにかく顔を合わせて話をする機会を作らなければならない。そうして地域に安心感を持ってもらい学生を受け入れてもらう下準備をすることが大事である。また学生に対しても同様で、私の場合は学校の文化祭にお邪魔したり、参加したボランティア先に

来ている学生がいたら声をかけてみたり、積極的にこちらから歩み寄るようにしていた。地域の活動先は口コミなどで拡大していく傾向が強かったが、学生は直接私が話すことによって参加してもらえることが多かった。これは他の地域の団体にも言えることだが、学生を巻き込みたいのであれば、まず自分たちが歩み寄っていくこと。そして学生たちの声をしっかりと聴くことが重要であると考えている。とかく最近はずみ単位で地域に関わる大学も増えてきているので、そういったずみにアプローチをかけて協力を仰いでみることも有効な手段の一つである。

(2) 活動現場におけるの伝達役と調整役

こうして学生と地域を繋げるうえでの両者との関係づくりを終えたら、いよいよ実践へと移る。最初のポイントとしては、気軽に参加できることから始めるということだ。Shake Hands では活動内容が“カジュアルなボランティア”であるので、当日来ただけでも簡単にできるようなものが多かった。中でも初めて活動に参加する学生には、なるべく参加して面白いと思えるような活動をピックアップして紹介していた。こうして参加して楽しいと思ってもらえる活動をピックアップしたら、あとは当日の動きである。ここで重要であるのが、学生と地域の伝達である。もちろんボランティアに参加する以上、やってもらいたいことが地域側にはあるのだが、それをうまく学生側に振ることが難しい。そんな時、私が地域側の指示を聞き、適材適所に学生たちを回すことをしていた。一度も若者を受け入れたことがない団体は指示を出す際に戸惑ってしまうことが多い、そんな時にこちらから指示を仰いだり、こちらができることを提示したりなど、普段からやり取りをしている私が間に入ることで団体側も安心して指示をだしてくれ、Shake Hands のメンバーにも代表の私から内容が伝わることで安心して動いていた。

また彼らにも個性や特性がある。特に初めて参加した学生はそういった部分が読みにくいので、なるべくわかりやすい内容のものを選びながら見極めていく必要がある。また自分がこの場において、役に立てているという感覚を学生が得なければ、彼らは心から楽しんだとは言えないだろう。彼ら一人一人が自己有用感を得られるよう、長所を活かした配置に割り振り、時には新しいことにも挑戦させる。そういった現場でのフォローがコーディネーターとして求められる力の一つになるだろう。

ここまでの私が実践してきた活動からまとめたコーディネーターの役割であるが、この先として学生たちの地域への中長期的な参画があるのだが、私自身まだそこまでは踏み込めていないのが現状だ。ここからの取り組みに関しては、私自身が今後取り組んだのちに改めて論じたいと考えている。

第5章 コーディネーターの育成と可能性

前章までは、私の現場での経験をもとにコーディネーターの役割や必要性について論じてきた。この章では、これからのコーディネーターの育成についてと、そのあり方について論じていきたいと思う。

(1) コーディネーターに求められる要素

現在私は千葉県内の 3 つの市で市民活動支援センターのコーディネーターとして勤務しているのだが、そこではすでにコーディネーター養成講座が行われている。私も講座の企画に立ち合っているのだが、これがなかなか難しい。理由はひとつ、実践なくしてコーディネーターは育成されないからだ。講座は少なければ 3 回、多くとも 5 回程度の連続講座の形が多いが、たった 5 回程度の講座ではとてもではないがコーディネーターとしてのノウハウを伝えることはできない。そもそも前述したとおり、コーディネーターの育成で最も重要なのは実践である。表 1 に示したような内容が各市町村などで行われている養成講座でみられる構成の一例であるが、この内容ではコーディネーターを知るきっかけ作りにはなれども、真なる育成にはなりえないだろう。私自身、この 2 年半の実体験の中でコーディネーターと呼ばれる経験値やノウハウを得たに等しい。座学やスキルを学んだのはここ 1 年くらいのものである。

| コーディネーター養成講座 (例) | 内容 |
|-----------------------|------------------------|
| 1. コーディネーターについて知る | ワークショップ、座学 |
| 2. コーディネーターとしての実践例を知る | シンポジウム、実践者登壇 |
| 3. コーディネーターのスキルを学ぶ | ファシリテーションや傾聴力、マネジメント力等 |
| 4. コーディネーターのスキルを学ぶ | 同上 |
| 5. プロジェクトを立ててみる | ワークショップ |

表 1 コーディネーター養成講座の例

また養成講座を見てきて感じたことがもう一つある。それはコーディネーターには適性があるということだ。スキルや経験を獲得しても、恐らく大半の人がコーディネーターとしては動くことができないと考えている。その理由は、コーディネーター養成講座を受ける大半がその市に住んでいる住人であるがゆえに、プロジェクトに関わる際にコーディネーターとしてではなく、プレーヤーとしてプロジェクトの中心に位置してしまうからだ。コーディネーターはあくまで、関わる人たちの力を最大限に引き出すための調整役である。その人がいなければ成り立たなくなってしまう立ち位置になってしまえば、第三者目線での冷静な調節は難しくなる。

ここで、私の考えるコーディネーター養成に必要な不可欠な要素をまとめると大きく二つある。一つは、座学で回数限定の連続講座を行うよりも、年間を通してコーディネーターに付き従い、とにかく現場で実践を踏むような養成の内容が必要であること。もう一つは、コーディネーターはその街の住民になるよりも、より第三者目線で流れを見ることが出来る外部の人間であるべきだということである。もちろん今まで各市町村が取り組んできた養成講座が無駄だとは言わない。しかし、今回私がこのレポートの中で論じてきたコーディネーターは恐らく今までのコーディネーターの在り方とは少し変わってくるのだと考え

ている。

(2) コーディネーター育成に求められる場づくり

若い学生と地域を繋ぎながらも、関わる人々の力を最大限に引き出しつつ、いずれはコーディネーターなしでも自走する流れを作り出す。こういった力を有するコーディネーターを育成していくには、育成の専門機関を作り、各地域から人財を集め、適性を見極めながら長い期間を通して育成していくほかない。具体的には、フットワークの軽い民間がNPOないしは組織としてのコーディネート機関を設立し、私を含めすでに地域にてコーディネーターとして動いている仲間を集める。その上で講座という形ではなく、育成対象になる人財（できれば地域のしがらみや柔軟に価値観を吸収していける大学生を含む20代～30代の若者が適していると考えている）を既に動いているコーディネーターに師事する形で直接現場にてOJTを行っていく。期間としては、経験上2年間を考慮しており、1年目はとにかく動いているコーディネーターに同行し感覚を身に付け、2年目に実際にコーディネーターとしてプロジェクトに関わっていく。適時、組織内で活動の情報共有や、必要なスキルの研修を行い、現場と連動して必要なノウハウを会得していくことで効率良く育成できると考えている。またこういった形であれば、コーディネーターとして動ける人財の情報が一元化され、必要な場に必要な人数を送り込むことも可能になるだろう。

今各地から、私のような人財が必要であるという声をいただく。非常に光栄であると同時に取り組みがいのあることだと思う。しかしながら、私の身は一つだけ。どうあってもすべてのプロジェクトに私一人の力で挑むことはできない。コーディネーターという職能が今後確実に必要になってくることは、私の今までの経験からも断言できる。だからこそ、これからの時代に備え、次代を担うコーディネーターの育成に着手していきたいと考えており、前述したコーディネーターの育成機関の設立を目指したいと考えている。

第6章 おわりに

このレポートの作成中に、松戸市のある地区からまちづくりのコーディネートを正式な仕事として依頼された。今までボランティアの中で担ってきたことを、仕事として初めて受けることができた。コーディネーターは、その特性上なかなか正規の職能として認められて来なかったが、今ようやくその傾向が崩れてきている。これからの時代、学生と地域間のみならず、様々な場面で中立の調整役であるコーディネーターが必要不可欠になってくるだろう。その時にコーディネーターとして動いていく方たちが自身の仕事として関わられるように、その土壌を開拓していきたいと思う。そしていつの日かコーディネーターを必要とせずとも、人と人とが繋がり、新しい可能性を生み出していけるような社会を創り上げていくことを、私の本レポートを通しての意思表示として締めくくりたい。